

HIGAN SENSEI

written by  
MASAHIKO SHIMADA

島田雅彦

彼岸先生

そして、フィクションだけが残った。  
現代日本文学の旗手が描く  
平成版「こころ」  
最新長篇

ダンテ・アル  
いうものを  
男もしてみんとて  
するなり

# 彼岸先生

工業学院图书馆  
藏 书 章

島田雅彦



島田雅彦（しまだ まさひこ）

一九六一年、東京に生まれる。四歳で川崎市に移る。県立川崎高校から東京外国語大学ロシア語科へ。三年次よりソ連・東欧研究会で活動。四年在学中の八三年、「海燕」に掲載された「優しいサヨクのための嬉遊曲」が八九回芥川賞候補作となり、最も新しい世代の作家として注目される。八四年、「夢遊王国のための音楽」（福武書店）で野間文芸新人賞を受賞。著書として他に「亡命旅行者は叫び泣く」「天国が降ってくる」「語らず、歌え」（福武書店）「僕は模造人間」「ドンナ・アンナ」「アルマジロ王」（新潮社）「夢使い」（講談社）「ロココ町」（集英社）「未確認尾行物体」（文藝春秋）などがある。

## 彼岸先生

一九九二年三月二五日 第一刷発行  
一九九二年六月二五日 第三刷発行

著者 島田雅彦

発行者 福武總一郎

発行所 鎌 福武書店

東京都千代田区九段南二一三一二八  
〒103（三）電話三三三〇一二三一  
振替口座（東京）六一一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）  
（定価はカバーに表示してあります）

彼岸先生  
目次



|   |          |     |
|---|----------|-----|
| 一 | 師弟関係     | 7   |
| 二 | 夜の同志たち   | 40  |
| 三 | 女の都      | 88  |
| 四 | 先生とぼくと両親 | 131 |
| 五 | 彼岸日記     | 157 |
| 六 | 此岸の家の記録  | 242 |
| 七 | アンチ・家族   | 263 |
| 八 | 千のみだらな夜  | 279 |
| 九 | それから     | 321 |

装  
丁  
ミ  
ル  
キ  
イ  
・  
イ  
ソ  
ベ

彼岸先生





# 一 師弟関係

## 1

——もう人間はいなくなってしまう。人間の影だけだ。現実もまた消えてなくなってしまう。そして、フィクションだけが残った。私も君も、一切が途中であり、しかも全てが終っているフィクションの吹けば飛ぶような登場人物に過ぎない。

ある時バジャマの上に手編みのセーターをかぶった先生は面会に訪れたぼくにこんなことをいった。仕事がうまくいかなかったのか、全てが未解決のまま残されているといった顔だった。あるいは、恋人の部屋で一夜を明かし、家に戻ってもう一寝入りというところだったのかも知れない。ぼくはその後何度かそういう顔を見た。いかにも「もう女なんてこりごりだ」と呟きそうな顔だった。普段彼はもつと不思議な確信に満ちた顔をしている。

ぼくは先生の顔のファンであると同時にその不思議な確信の隠れた信者の一人だった。彼の本には真実が書かれている。先生は何もかもわかってしまう人だ。先生にはツキがある。この人なら何か仕出かしてくれる。要するにぼくは先生を体のいい人生の教師と見立てたかったのである。教師は確信の人でなければならぬ。それが信仰の対象であれ、攻撃的であれ。ぼくは少

年時代から師弟関係のようなものに憧れていた。

あの時の先生の言葉が意味するところを十九になったばかりのぼくはおめでたく誤解していた。「これから君は私の作品の世界で生きるのだ」と呪文をかけられたつもりでいた。先生の作品が生まれる現場に足を踏み入れることを許されたということは、近い将来このぼくも先生の作品の中に登場するということだ。それはいつのことか楽しみにしていたが、のちに、あの言葉に隠された別の意味を知ることになった。

ところで、先生はこんなこともいった。

——君はハンサムだな。男は顔だよ。子供を産めないんだからせいぜい美しさを磨け。男は勃起するだけで、何ら創造的な仕事はできないんだ。天地創造をした神は女だって知ってるか？

登場人物はハンサムに越したことはないだろう。ぼくは顔のよさと無口なところを買われて弟子入りを許されたと思っている。

——ハンサムな青年と一緒にならこちらも得するだろうからな。

先生がガールハントをするつもりなら、ぼくは鉄砲弾にも猟犬にもなろう。運動神経と体力には自信がある。自分にできることなら何でもこの人の役に立ちたい。そう思うのは先生の愛読者でもあるぼくが一種の特異体質だからだろうか？ 人徳といったらいいのか、ぼくはその言葉を体現する人に会ったことがないから何ともいえないが、先生にはそれがあつたのじゃないかと思う。ただし、それは尊敬も皮肉もいっしょくたになつたものだ。とにもかくにも、同じ登場人物なら作者の好意が一心に注がれた美しい好青年がいいに決まつている。頭も悪いし、顔もまずい、取り柄といったら、腐つたものを食べても平気な胃袋と品位もプライドもないただ図太いだけの神経、そんな体育系の下司が先生の作品に時々登場しては、ほかの登場人物のひんしゆくを

買っていたが、ぼくは少なくともその類のエキストラにだけはなるまいと思った。

ぼくは自分を縮小も拡大もせず、等身大であろうと努めた。下手に利巧ぶったり、生意氣ぶったりしても炯眼の先生に鼻で笑われるのがオチだ。「正直さに勝る青二才の知恵はない」と彼は何処かに書いている。

先生はぼくが初めて見る小説家の実物だったから、先生の一举手一投足がそのまま『当世小説家氣質』という小説のようなものだった。

——ねえ、小説家って何とかと紙一重なんですよ？ 大丈夫なの、そんな人の弟子になって。

ぼくは砂糖子が心配していることにはあえて気を回さないようにした。小説家じゃなくなつて、一つや二つ奇妙なところはあるものだ。砂糖子にしても「ゲイの世界に憧れるわ」とか「私もダンディになりたい」などとよく口にする。ゲイやダンディに生き方を学びたいなんてちよつと変じゃないのか？ 「さりげなくおかしなことをやつたり、考えたりするプロが小説家なんだ」とぼくは彼女に教えてやつた。だから、小説家という人種はおかしなことをほんの少ししか考えられない普通人より何倍も普通でなくてはならない。ぼくや砂糖子がせいぜい九十パーセント普通なら、小説家は五百パーセントくらい正気なんだ、と。

——その人どういふ小説書いてるの？

——不思議な恋愛小説さ。

——面白い？

——わからない。ポルノなんだか、SFなんだか、政治小説なのか、ミステリーなのか。

——ゲイやダンディは出てくるの？

——いろいろ変な奴が出てくる。

ぼくには到底、先生の作品世界を説明することはできない。できるのはその世界に迷い込むことだけだ。

砂糖子は作品の内容より先生の容姿の方を心配した。彼女は醜い中年男を蛇よりも嫌っている。醜い中年が痴漢だったりしたら、彼女は勝手に死刑を宣告するだろう。幸い（別に砂糖子とは関係ないが）先生は中年になり切れず、くたびれた青年のまま一生を全うしそうな雰囲気があった。

結論からいえば、ぼくはいつの間にか先生のもとに出入りするようになり、ある時先生から「私の弟子にでもなるつもりか？」と問われ、「はい」と答えた。そして、先生は「それも面白いかもね」と認めてくれたのだ。

——あなた、小説家になりたいの？

砂糖子はこうもたずねた。

——いや、全然。

それは正直な答えだった。文を書きたいと思う気持ちと小説家になりたいと思う気持ちとは案外正反対かも知れない。少なくとも、ぼくは先生から小説の書き方を学ぼうとはゆめゆめ思わなかった。先生はぼくが時々会いたくなる人であって、それ以上でも以下でもなかった。ぼくが弟子になったのはいちいち先生に会う口実をひねり出さなくても済むからだだった。

## 2

先生はぼくの姉を先生と呼んでいたことがある。姉は音大の大学院で声楽を学んでおり、アルバイトで先生にオペラの発声法を教えたのだ。先生は自ら歌わずにいられないほどイタリヤ・オ

ペラの中毒なのだが、あいにく高い声が出せない。そこで近所に住む姉が先生の声の改良を手がけることになった。

——そんなに悪い声じゃないんだけど、すぐに息が上がっちゃうの。マラソンで最初の三キロをトップで走って、十キロあたりで棄権するような感じ。呼吸のとりに方に問題があるのね。でも本当に歌が好きみたい。難しいテノールのアリアばかり歌いたがるのよ。ハイCなんて出すにはまだ十年くらいかかりそう。Fシャープの音だってひっくり返っちゃうんだもん。

姉の話からぼくはまだ会ったことのない先生の第一印象を、顔を真赤にして裏声を出す中年男として思い描いた。早速、先生の作品を買って読んだが、途中で何度も作者の裏切りに合ってやめてしまった。少女漫画のようにはいかない。ぼくが会ったこともないタイプの登場人物たちが会話をしたり、恋をしたり、憎しみ合ったりしているのだ。舞台は東京であっても、彼らが話す言葉や直面している現実は何処か別世界のもののようにだった。ぼくには出る幕はなかった。たとえ登場人物になっても、作者に意地悪く解剖されそうだった。とはいえその後、忍耐強く何度も読み直し、先生の私生活の内側をのぞくにつれ、作品の世界は徐々に自分の体にフィットしてくるような気もした。彼の本を読むにはそれなりのトレーニングが必要なのだ。

先生のボイス・トレーニングの方は三ヶ月ほどで中断してしまった。姉がウィーンの音楽大学に留学することになったからだ。彼女は三ヶ月のつき合いを通して、すっかり先生のファンになった。男の趣味が先生のおかげで変わったようだ。「少し枯れた感じの方が魅力的だわ」とか「男は顔より背中ね」とか何処かで読んだようなことを得々と口にしていた。先生の不思議な人徳は姉にもじわじわと浸み込んでいったらしい。

先生の住まいはうちから自転車で二十分ほどのところにあった。リバーサイド・ヴィレヅと

いう九階建てのマンションの六階に奥さんと二人で暮っていた。ぼくはセブン・イレブンとレンタル・ビデオ・ショップがある雑居ビルの最上階に姉と二人で住んでいた。二つの住まいは多摩川の兩岸にあつて、晴れた日には自転車で橋を渡つて先生を訪ねるのも一興だった。

先生は社会的に通用している二つの名前、つまり本名とペンネームを持っていたが、ぼくには「先生」という名前一つで充分だった。けれども、ぼくは先生のためにとっておきの名前も用意していた。これはぼく専用の呼び名だった。ぼくがこの呼び名で先生を呼ぶ時、彼は誰の先生でもなく、ぼくの個人的な先生となるのである。その名はある日、川の土手を散歩している時に思いついた。先生は川の向う岸に住んでいる。だから……彼岸先生。

姉が先生のお宅に週一回通っていた頃、ぼくは三度先生に会ったことがある。最初は姉がレッスンに必要な楽譜を忘れて、それを自転車で行った時だった。

玄関に現れた女性がぼくを部屋に通してくれた。あとでその女性が先生の奥さんだと知ったが、その時はこの一組の男女が夫婦だとは思ひもよらなかった。ぼくは奥さんを姉の友達か何かだと勘違いもしたのだが、第一印象から先生は独身だと勝手に決めつけていた。

姉がいたおかげでぼくは畏まらずに済んだ。もともと、見知らぬ人と二人でいても、沈黙を守つていられる鈍感さをぼくは持ち合わせていた。むしろ、先生の方に居心地の悪さを強いてしまった。不意に現れた客の前で発声練習を続けるなんて小恥しいに決まっている。

——弟の菊人です。

ぼくは「初めまして。姉がいつもお騒がせしています」と奇妙なあいさつをした。姉が部屋で発声練習をしていると、貸しビデオ店やセブン・イレブンに來た客は一度、うちの窓を見上げてから店に入る。ぼくはその客にするあいさつを先生にしたのだ。先生はぼくの顔を見もせずに

「よくいらつしゃいました」といった。

結局、その日のレッスンはそこで中断して、みんなでお茶を飲んだ。一度はレッスンの邪魔にならないよう退散しようと思ったのだが、タイミングを逸してしまった。会話は姉が中心になって進んでいた。

— どんなものを食べると声がよく出るんですか？

先生の質問に姉は即座に「牛肉」と答えた。

— 理由はわかりませんが、牛肉と赤ワインはいいみたいです。逆にメロンはよくないって聞いたことがあります。でも全て気持ちの問題ですよ、先生。

ぼくは姉が先生と呼び掛けたのをその時初めて聞いた。以来、ぼくも姉に倣ってそう呼ぶことにした。ところで、奥さんも先生、先生と呼び掛けるものだから、ぼくの勘違いは責められないだろう。あの時、奥さんがいつていたことはぼくの記憶に鮮やかに残っている。

— この先生は家に籠っている時は誰とも喋らないし、元来愛想がないから、声が不機嫌なんです。それで、明るい声で話せるように歌を習うことにしたんですよ。ねっ先生。

その日、先生は終始無口だった。照れている感じではなかった。姉と奥さんの会話を聞きながら、「うん」とか「そう」とかいっただけで心は何処かに向って飛行を続けている様子だった。退屈し切っているような表情とそれを隠すような微笑からこの人は複雑な人なのだと思った。

よく夫と妻は似るといふけれども、先生と奥さんの場合はどうやら例外らしい。奥さんは先生を夫としてよりもおかしい他人として見ているんじゃないだろうか。

姉と奥さんは変に意気投合していたから、ほぼ同年代だと思った。姉は多少老けて見え、奥さんは逆に若く見えるから、そう錯覚しても無理はない。姉は二十三、奥さんはあとで二十九歳だ



と知った。あの日、二人は先生をそっちのけにして、海外旅行や芸能界や化粧品やらの話題を派手に繰り拡げていた。ぼくは二人の会話の間隙をねらって帰る体勢に入った。ふと、先生と目が合った時、彼はやれやれというサインをぼくに送ってきた。

帰り際、先生は誰にいうともなく、呟いた。

――十九の青年っていうのは毎日何を考えて暮しているんだろうね。

ぼくの代わりに姉が答えた。

――女の子のことでしょう。

――あっそう。それじゃ、私と同じじゃないか。私の精神年齢は十九くらいだからな。

先生は初めて声を出して笑った。あいにく、この冗談は彼が期待したほど二人の女性には受けなかった。

家に帰る道すがら、ぼくは姉にたずねた。

――あの人、先生の恋人なの？

――何いつてるのよ。奥さんに決まってるじゃない。綺麗な人でしょ。

――うん。でも、あんまり奥さんらしくないね。奥さんぶる気もないみたいだ。

――あたしたちの前だからでしょ。二人でいる時はちゃんと夫婦なのよ。

――先生はなかなか恰好いいね。

――そうかしら。若造りなだけじゃないの。でも、中年になっても、男は女をどう攻略しようか、そればかり考えて暮してるのね。

――女だって毎日男のことばかり考えて暮してるんだろ。

姉は鼻で笑いながら、ぼくの頭を小突いた。ところで、先生はどんな女のことを考えて暮して